

読書の特訓 乙

助詞と接続詞

・小学中学年以上向き・

題材・『一房の葡萄』

有島武郎

◆有島武郎

明治十一年三月四日～大正十二年六月九日

代表作 「或る女」（明治四十四年）

「カインの末裔」（大正六年）

「生まれいづる悩み」（大正七年）

「小さき者へ」（大正七年）

「一房の葡萄」（大正九年）

「溺れかけた兄妹」（大正十年）

など多数

◆「一房の葡萄」

作者の実体験をもとに書かれたとも言われている。若い外国人女性教師の愛と寛容を主題とし、それによつて成長する少年たちの心を描いた名作。大正九年八月初出。

「読書の特訓」について

このテキストは、読書を進める事を第一の目的としたテキストです。読書は思考力と同じように強制してさせることが難しいものです。読みたくない本を読む事を強制されると、子供はとりあえず「読んだふり」をするとか、字面を追うだけで内容は頭に入っていないなど、無駄な時間を費やす事になります。

しかし読書は国語力を高めるためにはどうしても必要な学習の一つです。私どもの経験から申しますと、本当に読書が好きで、三度の食事より本を選ぶというような子供は、間違いなく高い読解力を持つており、非常に難度の高い問題でもおおよそ解く事ができます。逆に読書の嫌いな子、本を読む習慣のついていない子は、いくら読解問題の演習をしたところで、なかなか読解力が向上しないのが実情です。ですから読書は国語の指導にはどうしても不可欠なものだと考えられます。

このテキストの問題を解くためには、どうしても文章の前後関係を詳しく読み取る必要がある、つまり文章を精読する必要があります。従つて、正しく解答できていれば、少なくとも文章をちゃんと読んでいると いう事が判断できます。正しく解答しようという意志が、文章を細かく読み取るという事に自然につながるのです。このテキストを解く事によって、自然に読書をする習慣が身につきます。

本書は読解力をつける事を目標としたもので、文法体系を学ぶ問題集ではありません。従つて設問には、単独ではない助詞（助詞+助詞、助動詞+助詞など）、および単語の語尾と考えられるものも含んでいます。

一、次の話を読みながら、〈かっこ〉内の助詞や接続詞の正しいと思われる方に丸をつけなさい。

『一房の葡萄』 有島武郎

僕 ^{ぼく} _へ 小さい時に絵を描くこと _{へが} 好きでした。僕の
通つていた学校は横浜 _{かよ} 山の手という所 _{へは} ありまし
たが、そこいら _と 西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学
校 _に 教師は西洋人ばかりでした。 _も そして、その学校の
行きかえり _{しか} いつでもホテルや西洋人 _で 会社など
がならんでいる海岸の通り _が 通るのでした。通りの海添
い _へ 立つて見ると、真青な海の上 _と 軍艦だの商船だ
のが一ぱいならんでいて、煙突 _{から} 煙の出ているのや、
檣から檣 _は 万国旗をかけわたしたのやがあつて、眼 _め
へ _と いたいよう _も 綺麗でした。僕 _は よく岸に立つ

一、次の話を読みながら、〈かっこ〉内の助詞や接続詞の正しいと思われる方に丸をつけなさい。

『一房の葡萄』 有島武郎

僕は 小さい時に絵を描くことが 好きでした。僕の

通つていた学校は横浜(の) 山の手という所(は) あります

たが、そこいら(と) 西洋人ばかり住んでいる町で、僕の学

校(も) 教師は西洋人ばかりでした。(そして) その学校の

行きかえり(しか) いつでもホテルや西洋人(の) 会社など

がならんでいる海岸の通り(を) 通るのでした。通りの海添

い(が) 立つて見ると、真青な海の上(と) 軍艦だの商船だ

のが一ぱいならんでいて、煙突(のに) 煙の出ているのや、

檻から檻(へ) 万国旗をかけわたしたのやがあつて、眼

と(が) いたいよう(も) 綺麗でした。僕(は) よく岸に立つ

それにして僕^{ぼく}に大好きなんのいい先生^はどこに行かれたでしょう。もう一度と^やは^あ遇えない^もと^と知りながら、僕は今^{しか}あの先生^がいたらなあ^でと思ひます。秋になるといつでも葡萄^{ぶどう}を^{ふさ}房^はは紫色^{むらさきいろ}に^も色づいて美しく粉^{こな}を^をふきますけれども、それ^はを受けた大理^{だいり}石^{せき}の^でような白い美しい手はどこにも見つかりません。

それにしても僕 ^{（の）}に 大好きなあのいい先生 ^{（は）}どこに

行かれたでしょう。もう一度と ^{（は）} 遇えない ^{（も）} 知りな
がら、僕は今 ^{（でも）} あの先生 ^{（が）}へ いたらなあ ^{（で）} 思い
ます。秋になると一つでも葡萄 ^{（の）}を 房は紫色 ^{（に）}色づい
て美しく粉 ^{（を）}ふきますけれども、それ ^{（を）}は 受けた大理
石 ^{（の）}で ような白い美しい手はどこにも見つかりません。

「一房の葡萄」原文テキストについて

底本：新潮文庫『赤い鳥傑作集』坪田譲治・編 昭和三十年六月二十五日初版
昭和四十九年九月十日改版二十九刷 昭和五十九年十月十日改版四十四刷
初出：『赤い鳥』大正九年八月号
入力：鈴木厚司 平成十一年二月十三日公開 同年七月三十日修正
青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

問題、解答について

問題および解答については、M.access (エム・アクセス) の編集によるものです。問題、解答に関する一切の権利はM.access (エム・アクセス) 及び株式会社認知工学に帰属します。一部、漢字をひらがなに変更した部分があります。

☆学びたいといふ気持ちが大切です
勉強を強制されないと感じているのではなく、心から学びたいと思つていぬ」とが、
子どもを伸ばします。

☆意味を理解し納得する事が学びです
たとえば、公式を丸暗記して当てはめて解くのは正しい姿勢ではあります。意味を理
解し納得するまで考えることが本当の学習です。

☆学びには生きた経験が必要です
家の手伝い、スポーツ、友人関係、近所付き合いや学校生活もしつかりでない、「学び」
の姿勢は育ちます。
生きた経験を伴いながら、学びたいといふ心を持ち、意味を理解、納得する学習をすれ
ば、負担を感じるほどの多くの問題をこなさずとも、子どもたちはそれぞれの目標を達
成することができます。

発刊の「」と「」

「生きてゆく」ということは、道のない道を歩いて行くようなものです。「答」のない
問題を解くようなものです。今まで人はみんなそれぞれ道のない道を歩き、「答」のない
問題を解いてきました。
子どもたちの未来にも、定まった「答」はありません。もちろん「解き方」や「公式」
もありません。

私たちの後を繼いで世界の明日を支えてゆく彼らにものとも必要な、そして今、社会で
もつとも求められている力は、この「解き方」も「公式」も「答」すらもない問題を解い
てゆく力ではないでしょうか。
人間のはるかに及ばない、素晴らしい速さで計算を行うコンピューターでさえ、「解き
方」のない問題を解く力はありません。特にこれからの人間に求められているのは、「解
き方」も「公式」も「答」もない問題を解いてゆく力であると、私たちは確信しています。
M·access の教材が、これから社会を支え、新しい世界を創造してゆく子供む
たちの成長に、少しでも役立つことを願つてやみません。

国語読解の特訓シリーズ
シリーズ十 読書の特訓 乙 助詞と接続詞の練習

初版 第二刷

編集者 **M·access** (エム・アクセス)
発行所 株式会社 認知工学
〒六〇四一八一五五 京都市中京区錦小路烏丸西入ル
電話 (〇七五) 二五六一七七二二三
郵便振替 〇一〇八〇一九一一九三六一 株式会社認知工学